

つたえる地域 つながる地域

子どもの感性 どう磨く

今秋オープン、市新美術館の活用策探る

今秋にグランドオープンを迎えた八戸市新美術館の未来と、子どもの文化活動について語るフォーラムが21日、同市の「はっち」で開かれた。小林眞市長や市公民館

の笹谷伸夫館長、八戸学院大短期大学の佐貫巧准教授が、新しい施設を生かして若い感性を育てる重要性に関して意見交換した。

（小林彩乃）

はっちでフォーラム

同市で子育て支援を行う親しみイベント「国際子どもNPO法人はちのへ未どもと舞台芸術・未来フ

来ネットが主催。子ども エステイバルin青森」

たちが音楽や美術などに の一環として開催した。

フォーラムで小林市長は新美術館について「学校教育と連携しながらアートシーンを活発化させていけたら」と話した。

市内などで幼児や小学生対象の芸術教室「アートイス」を開く佐貫准教授は、開館後に新美術館でも活動する。「子どもに接する大人への芸術教育も進めていきたい」と意欲を見せた。

子どもたちが文化に触れる大切さについて語り合う場面も。笹谷館長は講師を務める小中学生向け演劇塾で参加者が芝居以外にも自信を付けた経験を紹介した。

新潟県出身の絵本作家のサトシユンさんもゲストで登場。子育て中にわが子が物語を作った話を聞かせてくれた思い出などを振り返った。

同フェスティバルは27、28日にもはっちで開かれ、クラシック音楽のコンサートや和太鼓の体験を行う。

八戸市新美術館建設推進室（高森大輔室長）は21日、本棟工事が完了した市庁前の新美術館で、同館と学校連携の在り方を考えるプロジェクトチーム（PT）の会議を開いた。

同室は本年度、市内小中の教員、同館学芸員、専門家ら計19人によるPTを組織。美術教育を専門とする武蔵野美術大の三澤一実教授をアドバイザーに迎え、美術館と学校連携の実例などを勉強してきた。

3回目となる今回は、具体的な案について協議。メンバーから、児童、生徒に美術鑑賞の機会を提供したいとの意見が出たのに対し、会議にオンラインで参加した三澤教授は、市民が自由集まって活動する巨大空間「ジャイアントルーム」を活用した鑑賞会や出前講座を提案した。

このほか、開館を記念した児童、生徒による巨大絵画や、学校の枠を超えたアート作品の制作、子ども目線で発信する美術館新聞の発行を進めるとした。

今後は、5月をめどにそれぞれの実施計画を作成。10月ごろまでに順次、実行に移し、開館後に活動を本格化させる予定。

三澤教授は取材に対し、「自由な発想で楽しんでほしい。地域を巻き込んだ美術教育を進めることで、子どもの郷土愛の育成にもつながる」と強調した。

（玉川那津美）